

世界で初の突撃銃 STURMGEWEHR 44

“必要は発明の母”ということわざがある。
破竹の勢いでロシアに攻め込んだドイツ軍は何倍もの兵力を持つソ連軍との戦いで
新しいライフルの必要性を痛感し、着実にその開発と運用を進めていった。
Sturmgewehr、直訳すると「嵐の銃」となる
このライフルはドイツ軍の「実戦とは何か」に対する答えである。

Report by KEN NOZAWA

図版解説 / 鈴木健太郎
Photo / U.S.ARMY, Bundesarchiv, Imperial War Museum,
The Swedish Museum, WPP Archive
Illustration / M. Kelly

時代を先取りし過ぎた“先見の明” 難題あるアサルトライフルへの道

ミリタリーファンやガンファンにとって心に残る火器は幾つもある。それらは個人によって異なるだろうが、彼らの意見をまとめていくと、結果的に特定の機種に収束していく。ピストルでいえばマウザーミリタリーやコルトガバメント(M1911/M1911A1)といった、ミリタリー使用としても民間用としても成功したモデルだ。近代に目を向けるなら樹脂製ピストルの流れを作ったグロックピストル(シリーズ)など、これは単に傑作というだけでなく、ピストルの方向性、在り方をも変えたと言える。そのことは、新規開発されるピストルの多くが樹脂多用モデルである事実か

らも明白である。そして、名作・傑作はサブマシンガンにも見られ、古くはドイツのベルグマンMP18、MP40、アメリカのトンプソンSMG、M3グリースガン、そしてイギリスのステンSMGやソ連のPPSh-41、イスラエルのウージーSMGと続き、MP5シリーズも絶対に外せない一挺だろう。ミリタリーファンやガンファンであれば、それら時代を彩った逸品たちを思い浮かべるに違いない。

では、アサルトライフルはどうか?

そう質問されたとき、真っ先に思い浮かぶのは米国のM16系ライフルやソ連のAK-47系ライフルだろう。その二機種は近代アサルトライフルの

STURMGEGWEHR 44





プロジェクトデルタ 偵察マニュアル Part 8

スナッチ(敵の捕虜獲得)に関する諸注意 後編

文/鈴木健太郎 写真/U.S. ARMY, U.S. NAVY, USMC, WPPアーカイブ



(上) 北ベトナム軍および解放戦線との戦いを想定して建てられた訓練施設、通称ベトコンビレッジと解放戦線に扮した仮想敵役の兵士たち。二人はK-50MサブマシンガンとM14ライフルで武装しているが、K-50Mにドラム型弾倉が付けられているのは少々珍しい。この写真はジョージア州のフォート・ムーア、かつてのフォート・ベニングで撮影されたもの。(下) 解放戦線兵士を捕らえたSEAL隊員。後ろを歩く隊員はRTO(無線通信手)で、左手でハンドセットとメインアームを持ちながら脇には解放戦線兵士が持っていたAK-47を抱えている。



(上) マサチューセッツ州のフォート・デベンズに建てられたベトコンビレッジの全景。ベトコンビレッジはアメリカ本土だけでなくハワイ、沖縄の基地にも作られていた。(下) 雪が残るフォート・デベンズのベトコンビレッジ。仮想敵役の兵士はノンラーこそ被っているもののスノーカムフラージュパーカの着用で北ベトナム軍や解放戦線とは似ても似つかない姿になっている。



(上) 仮想敵の身体検査を行なう訓練生。M14ライフルに空包用のアダプターが付けられているのに注意。(下) 同じく仮想敵を身体検査する訓練生であるが、撮影場所はベトコンビレッジではないようで、仮想敵は白いTシャツにファティーグパンツという出で立ちである。



スナッチに際する待ち伏せ

スナッチに際する待ち伏せは一般に計画に則って行なわれる4種、不慮の事態に乗じて行なわれる2種の計6種がある。スナッチの実施にあたってはチームリーダーが現地の地勢、天候、敵の状況、チームメンバー各員の装備を踏まえたと上で計画的な待ち伏せの一つを選び、決定案に加えて不慮の事態における2種の待ち伏せの訓練とリハーサルを行っておく。計画的な待ち伏せと不慮の事態に乗じて行なわれる待ち伏せの詳細は以下の通り。

一 計画的な待ち伏せ

a CS (催涙) ガスをを用いた待ち伏せ

1 長所

- a 敵を速やかに行動不能にすることができる上、正確な反撃を受ける危険がなくなる。
- b 犬を使った追跡をかわすことができる。
- c 敵がガスマスクを着けたとしても、ガスマスクの着用で視界が遮られるため反撃の効率が落ちる。

2 短所

- a ガスの使用によりスナッチの痕跡を消すことが出来なくなる。
- b ガスの一部が捕虜や味方の衣服にまとわりつくため、撤収の際にヘリクルーにも悪影響を与える恐れがある。
- c ガスマスクの着用により視界が狭くなる。
- d ガスを浴びた捕虜がパニックに陥って逃げ出してしまい、ふたたび捕まなければならない恐れがある。
- e ガスは一般に爆発によって飛散するため、爆発音でチームの存在が露呈してしまう。

3 そのほかの注意

ガスをを用いた待ち伏せではチームメンバー各員が予めガスマスクを頭の上にかけておくこと。そうすれば実行の際に素早くマスクを着けることができ、遅れをとるような事態が避けられる。



干し草の山に隠れていた仮想敵を連れ出そうとする訓練生。北ベトナム軍と解放戦線はあらゆる場所に隠れ場所やトンネルを作っており、ひとたび見失ってしまうとふたたび捕らえるのは非常に難しかった。サウスカロライナ州フォート・ジャクソン



PATCH & INSIGNIA IRAQ WAR ISOF



/ALLIED ARMED FORCES

イラク戦争 イラク特殊部隊 連合軍参戦部隊編

2003年3月20日より米軍を主体とした連合軍によるイラクへ侵攻した軍事作戦「イラクの自由作戦」。フセイン政権の陥落、アルカイダをはじめとするテロ組織や住民反乱そして宗派間抗争など、2011年12月18日に米軍撤退による戦争終結宣言によって事実上終了した長きに行なわれた戦闘を終じてイラク戦争と呼ぶ。そのイラク戦争に関わったイラク現地の部隊や参戦した連合軍のインシグニア・パッチを紹介する。

文/DJちゅう 写真/DJちゅう、U.S.ARMY、ISOF

イラク軍、特殊部隊や法執行機関などはフセイン政権陥落後、親米国政権誕生後の2003年頃に多国籍軍によって再編成され、新しく生まれ変わり設立された。イラクメイドのパッチは縫製が甘かったり、英語のスペルミスがあったりと荒削りなものが多いが、ローカルメイドにしかない味わい深

い趣を醸している。そんな彼らの実物パッチや、リプロ品としてコレクター向けに生産されたものを厳選し、一新されたインシグニアマークと共に紹介する。後半ではイラク戦争に関わった米陸軍、海兵隊、英軍や国境を超えた特殊部隊タスクフォースのインシグニアを紹介しよう。

THE EQUIPMENTS OF THE U.S. FORCE

第197回 [現用米軍装備カタログ]

「海」装備特集

part 12

1990年代後半～2000年代の強襲上陸装備
CQB&VBSS装備編

●解説/松原 隆 ●撮影/山崎 学
●協力ショップ/LAZY CAT、トイソルジャー、TRI'S (旧特小工房)
●協力/木島秀邦 ●参照/Wikipedia



高度な戦闘技術を用いるVBSSチーム

米海軍SEALの船舶臨検VBSS (Visit Board Search and Seizure) 部隊において、敵との間合いが100m以内となると、近接戦闘術=CQB (Close-quarters Combat) が必要に応じて求められ、チームの統制はもちろん、個々の戦闘技術・経験・スピードが試される。船舶臨検に際しても、協力的な対象者と非協力的な対象者で対応は異なってくる。Navy SEALsなどの特殊部隊が人質救出作戦を行なう際は、隊内秘伝の応用技術が使用されることもありうる。作戦環境や武器開発の技術が異なったり、政治的考慮が必要とされたり、現場において敵味方・民間人が混在していることがあるからだ。そして圧倒的な人員と火力による迅速な突入。意思の固いテロリストに対して、ゆっくりとした作戦では双方の被害が増えてしまう。だからこそ、瞬時の判断と適切な対応が常に求められるのだ。

今回は1990年後期から2000年のSEAL隊員たちが、SPIEハーネス・アッセンブリーを装着して空母からヘリコプターで空中移動して目標の船舶を強襲臨検する装備を紹介する。



COLT GOVERNMENT MKIV SERIES'70 WOOD GRIP Ver.

●Photos & Text by SHOTGUN MARCY
ウエスタン アームズ 03-3407-5922
http://www.wa-gunnet.co.jp



MkIV S'70の刻印は、M1911シリーズ中もっともバランスが良く洗練されているといわれるパターン。スチールの冷たさと重厚さを湛えた外観に良く似合う。

トリガーは前面に滑り止めのグルーブを刻んだショート・タイプ。近代型ガバメントのベーシックなデザインだ。



メタル・チャンバーカバーもS'70タイプの刻印。スライドの刻印と共にチャンバーの刻印パターンも、コレクション性を高めている。

現在も カタログ・モデルとして 生産が続けられる 1970年代の傑作M1911!

現在でも人気筆頭に挙げられるコルトM1911シリーズは、19世紀半ば以降、数々の米軍制式拳銃を生産してきたコルトが、米軍の要請を受けて開発したセミオート。1911年に完成された最終改良モデルが、「オートマチック・ピストル キャリバー.45モデル・オブ1911 (ピストル・キャリバー.45オートマチック M1911)」の名称で米軍に制式採用された。1世紀を超えてなお人気不衰えないM1911のスタートだ。コルト社は、米軍の制式採用とほぼ同時に、同仕様のモデルを「コルト・ガバメント」の名前で一般市場に供給し始めている。

米軍は1922年に、第一次世界大戦に実戦投入されたM1911に対する前線の評価をもとに改良点をまとめ、1923年に改良モデルをコルト社に発

注した。1926年になってこの改良モデルを制式名「M1911A1」に改称。この改良モデルは、以後、ベレッタM9にバトン・タッチするまで、70年以上に渡って米軍制式採用拳銃の座を守り抜いた。

コマーシャル・モデルも、米軍のマイナーチェンジにしたがうが、その後、さまざまな口径バリエーションと刻印パターンを生み出し、高い信頼性を世界中で獲得する。中でも、1970年代半ばに登場した「MkIV シリーズ'70 (以下、S'70)」刻印のモデルは、近代的なパーツ・デザインと、バランスの良い刻印パターンで、ガバメント・シリーズの代表バリエーションとなり、現在もS'70刻印のモデルがコルトのカタログ・モデルとして生産されるほど

グリップはブラッド・ウッドを素材にしたフル・チェッカー・タイプ。独特の編み目チェッカーが滑りにくくソフトなグリップ・フィードリングを提供する。

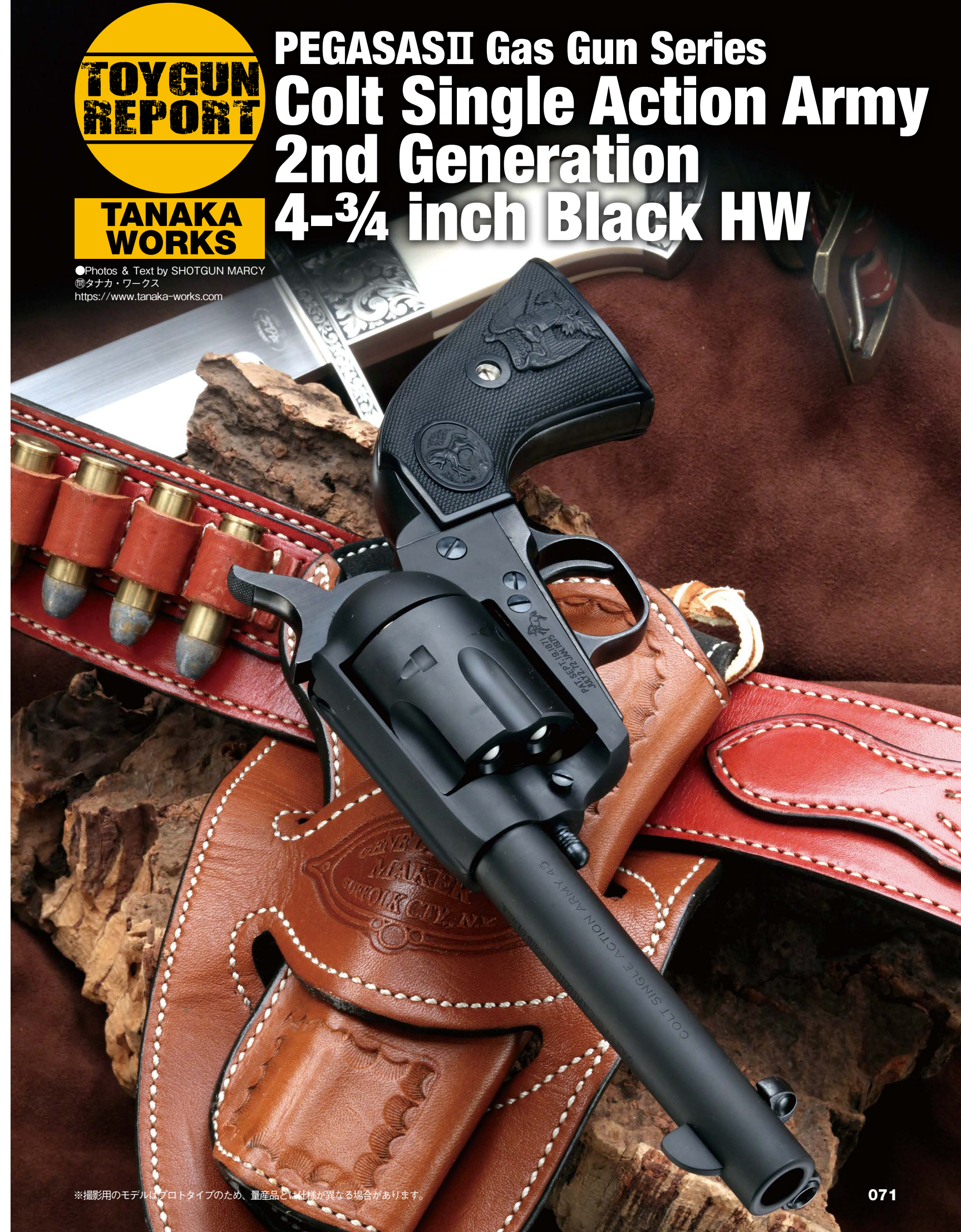


**TOYGUN
REPORT**

**TANAKA
WORKS**

●Photos & Text by SHOTGUN MARCY
@タナカ・ワークス
<https://www.tanaka-works.com>

PEGASASII Gas Gun Series Colt Single Action Army 2nd Generation 4-3/4 inch Black HW



※撮影用のモデルはプロトタイプのため、量産品とは仕様が異なる場合があります。

ミリタリア・ラウンドアップ! Militaria Roundup!

復刻M1956装備とベトナム戦争関連装備

夏恒例のイベントとなったアホカリプスに代表されるように、ミリタリー趣味で大きな分野を占めるベトナム戦争。 **Part 2**

今回は続編として陸軍マニュアルに準じた装備の組み上げと、リエナクトで利用可能なアイテムを紹介しよう。

解説/菊月俊之 写真/青木健格 撮影協力/サムズミリタリ屋 <https://www.sams-militariya.com>

M1956/61装備の限界と大型リュックサック

M1956/61装備は兵士個人が携行する装備を最小限とし、行動を容易とすることを目的に開発されたが、ベトナムの戦場では決して実用的ではなかった。定数の弾薬や水の量は数日間の作戦行動では不十分で、M56/61装備のフィールド・バックは必要な荷物を運ぶには容量が小さすぎた。その結果大型のリュックサックが開発され、フレーム式のライトウェイト・リュックサックとトロピカル・リュックサックの2種類が採用されている。前者は以前紹介したので今回は省略するが、後者のトロピカル・リュックサックは陸軍ナティック研究所が開発した大型のナイロン製リュックサックで、リュック背面にはX字の板バネ製フレームが取り付けられた。トロピカル・リュックサックは66年からベトナムで実証実験が開始され、その結果改良を加えて68年に採用されている。しかし調達が遅れたため支給量は充分ではなかった。



ライトウェイト・リュックサック

ライトウェイト・リュックサックは本来寒冷地用に開発された装備で、1965年に制式化された。アルミ製のフレームとナイロン製リュックサックから構成され、フレームはリュックサックを外して「背負子」としても使用された。ベトナムのアメリカ兵はライトウェイト・リュックサックに大半の荷物を収納あるいは装着し、戦闘開始時にリュックを落とし、戦闘終了後に回収するのが普通だった。ベトナム撤兵を受け、73年に制式アイテムから外されている。



トロピカル・リュックサック

トロピカル・リュックサックは陸軍ナティック研究所が南ベトナム軍レンジャー用に開発したレンジャー・バック（通称ARVNリュックサック）をベースに、体格の大きいアメリカ人向けにリュックを大型化し、外部ポケットも2つから3つに増えた。本体はナイロン製で、本体と外部ポケット用の防水ライナーが容易されている。1965年に採用され兵士からの評判はよかったが、アメリカのベトナム撤兵により73年に制式から外された。



ライトウェイト・リュックサックを背負った第4歩兵師団第8歩兵連隊A中隊の擲弾銃手。ヘルメット・カバーがタイガー・ストライプ・パターンローカル・メイド品なのに注目。1966年12月撮影。ベトナム戦争の小銃兵は最大で24個のM16ライフル用2連マガジン、手榴弾数発を携行。それ以外に支援火器用の40mmグレネードや、M60機関銃用の弾帯を分担して携行した。ベトナム戦争の兵士が携行した荷物に関してはティム・オブライエンの短編小説集「戦争の話をしよう」（文春文庫）の一編「兵士たちの荷物」に記述があり、興味のある方には一読をお薦めする。(Photo : Department of Defense)

ベトナム戦争の海兵隊装備

アメリカ海兵隊は第2次大戦で陸軍と異なる装備を使用した。それはベトナム戦争でも同様だった。陸軍のM56/61装備に相当する海兵隊の装備は基本的に大戦中と同じで、戦闘携行品用のM1941フィールド・バックと生存携行品用のM41カーゴ・バック、そしてベルトとサスペンダーが基本。ベルトは使用する銃（ライフル）によって異なり、ベトナム戦争ではM14ライフルマガジン・ポーチを装着する装備ベルトを使用した。海兵隊装備の復刻品も作られているが、それらは布地の色が大戦中のカーキ。現時点でベトナム戦リエナクターはオリジナルを探しつかないのが残念。

海兵隊 M14ライフル用マガジン・ポーチ

陸軍ではM14ライフル用のマガジンをM1956装備のアムニション・ケースに入れて携行したが、陸軍と異なる装備を使用する海兵隊では専用のマガジン・ポーチ（1本用）を使用した。ポーチの背面には2個のプレス・スタッド・ファスナーが付き、着脱位置（高さ）を変更できる。またポーチ下部のアイレットにはダブルフックが付いた装備を連結できる。



海兵隊 個人装備ベルト

海兵隊が使用したM1961ロード・キャリング・ベルトはM14ライフル用マガジン・ポーチ装着用として採用された装備で、前回紹介したM1911A1ピストル用のM1923マガジン・ポケットの装着も可能。M61ベルトの初期タイプは大戦中のM36ピストル・ベルトと同じく、バックルの留め具（クロージャー）部分が「T字」形だったが、後期タイプではM56装備と同じ「ボタン」形となった。またベルト・キーパーがM36ベルトと同じ、段のついたものを使用しているのもM61の特徴。写真は複製品で、クロージャーがボタン形の後期タイプを再現している。(撮影協力:サムズミリタリ屋/VN戦米海兵隊M61/M14用ピストルベルト(価格3080円))

M14ライフル

ベトナム戦争初期に制式小銃として使用されたM14ライフル。セレクトティブ・ファイア機能（セミ/フルオート射撃、切り替え式）を備える威力の大きい7.62mm×51弾（7.62mm NATO弾）を使用した。ジャングル戦には不向きだった。M14はM16ライフルの制式採用でベトナム戦争中に2級兵器となったが、狙撃モデルのM21がベトナムの戦場で使用され、大きな戦果をあげている。(Photo : U.S.A.F.)



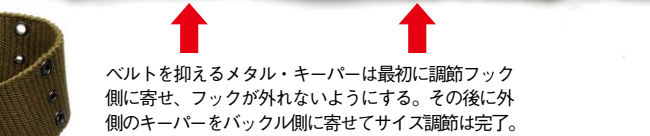
M1956装備の組み上げ

ASSEMBLING OF M1956 LIGHTWEIGHT LOAD-CARRYING EQUIPMENT

前回では復刻版M1956/61装備を構成するアイテムを紹介したが、今回はその組み上げ方法を陸軍マニュアルFM21-15 "Care and Use of Individual Clothing and Equipment" にしたがって紹介しよう。ちなみにマニュアルによる手順はあくまで基本であり、ベトナム戦争では水筒を2個携行するなど、兵士によってアレンジが加えられている。リエナクターは当時の写真も参考にされたい。

①ベルトのサイズ調節

M1956装備の基本となるのが各種装備を装着するピストル・ベルトで、最初に行なうのがサイズ調節。サイズは、ベルトを締めた際に服を締めつけない程度の緩さが適正。手順は①両側のフックを中央アイレット（はと目）から外し、伸ばすか縮めるかして長さを調節する。②両側のフックを一番近い中央アイレットに引っ掛け、メタル・キーパーで押さえる。③もう一方のメタル・キーパーをバックル側に寄せる、というものである。



↑ ↑
ベルトを抑えるメタル・キーパーは最初に調節フック側に寄せ、フックが外れないようにする。その後、外側のキーパーをバックル側に寄せてサイズ調節は完了。

②フィールド・バックの装着

フィールド・バックをベルトに装着する際は①バックの背面を上にして置き、両側のスライド・キーパーを開く。②ピストル・ベルトの裏側を上にし、バックルの「雄」が向かって左にくるようにバックの上に置く。③ベルトとバックの中央を合わせ、ベルトをバック側のスライド・キーパーに挟み込む。④スライド・キーパーを閉じて完了。マニュアルには「装備の紛失（脱落）を避けるため、キーパーのスライド先端を確実にクリップ側の穴に差し込むこと」と記されている。

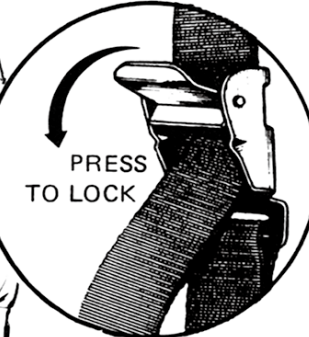
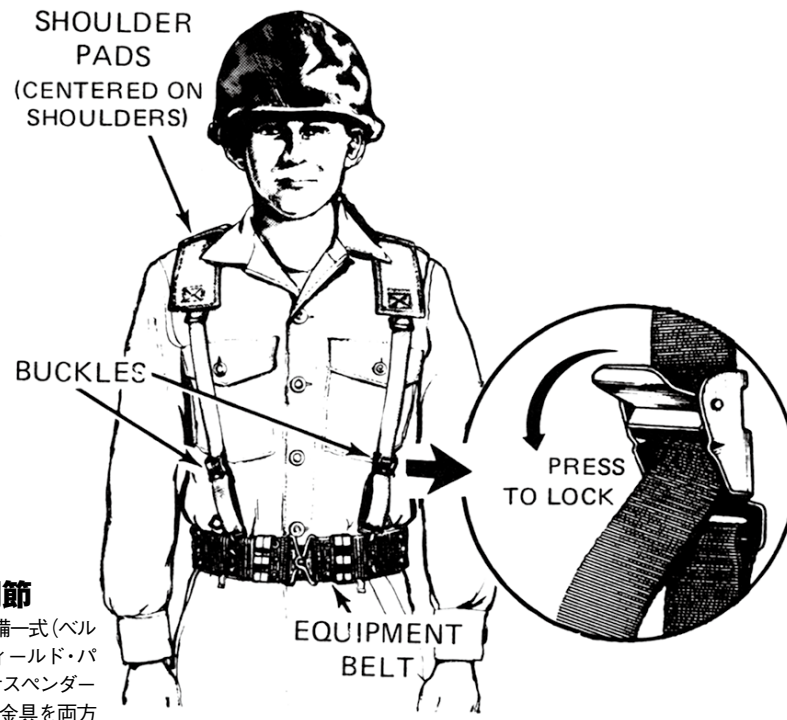
サスペンダーとバックを連結後、フロント・サスペンダー・ストラップを連結する。①ピストル・ベルトのバックルを閉じ、サスペンダーを手前に折り返して表側を上にする。②フロント・サスペンダー・ストラップのフックを、ベルト左右のベルト・ファスナー（キーパー）に一番近いアイレットに連結する。その際はキーパーの位置をずらしてやるとフックを連結しやすくなる。



SHOULDER PADS (CENTERED ON SHOULDERS)

↑ ↑
金具とアイレットを連結する際には、フックの開いた側を外側に向け、金具側面のループがベルト・バックルの反対側に来るようにする。またアムニション・ケースが空あるいは中身が少なくなると、ベルトがずり上がることがあるが、それを防ぐにはサスペンダーの連結位置を腕の側に移す。

BUCKLES



PRESS TO LOCK

EQUIPMENT BELT

④フロント・サスペンダー・ストラップの調節

①ここまで連結した装備一式（ベルト、サスペンダー、フィールド・バック）を装着する。②サスペンダー正面ストラップの調節金具を両方とも開く。③サスペンダーのショルダー・パッドが肩の中央、ベルトの位置が腰の高さになるように、サスペンダー・ストラップの長さを調節する。④位置が決まったら、サスペンダー正面ストラップの調節金具を締める。





GAS BLOWBACK
MACHINE GUN
URG-I 11.5 inch
SOPMOD BLOCK 3

Photo & Text by Takeo Ishii
東京マルイ ☎03-3605-1113
www.tokyo-marui.co.jp

次世代電動ガンで圧倒的人気を誇る最新鋭の特殊部隊仕様
11.5インチ短銃身カービンが、待望のガスブローバック化&緊急新発売!

**GAS BLOWBACK MACHINE GUN URG-I
11.5inch SOPMOD Block 3**
●全長:750mm/825mm ●重量:2,935g(※空マガジン込)
●インナーバレル長:250mm ●装弾数:35+1発 ●動力
源:ノンフロン・ガンパワー ●価格80,080円 ●好評発売中!

写真に使用・搭載されている東京マルイ純正オプションパーツ

●MTDマライタクティカルドットサイト 21,780円
●マイクロライトCQXフラット・ダークアース 7,480円



「S、M、L (=それぞれ
7・5・3スロット)」の黒
い樹脂製M-Lokパネル
が各1枚づつ、豪華な化
粧箱入りで付属。

「ガイズリー/スーパーモジュラーレールMK16
M-Lok (10.5inch・DDC)」の基部、テイクダウ
ンの際にロアレシーバーと接触する位置には「傷
防止シール」が貼付されている。新品を手にする
ユーザーのための細やかな配慮が嬉しい。



ロック解放が左右両側で行なえ、指掛けも大型化され
た「ガイズリー/AHC (=エアボーンタイプ・チャー
ジング・ハンドル) DDC」はガスブロー用の新規制作パ
ーツ! 実銃同等、操作時にはストック上部に擦れる
ため、新品状態ではココにも「傷防止シール」♪

米軍制式採用カービンM4A1の射撃精度を
「特殊部隊が想定するすべての条件下で向上させる」事を目標とした
拡張パーツキット供給計画、「SOPMOD (ソップモッド) M4プログラム」。
その最新形態=Block3と目される最新トレンド・スタイルが「URG-I (=ユー・アール・ジー・アイ)」, すなわち
「Upper Receiver Group-Improved (アッパー・レシーバー・グループ改良型)」である。

**3世代 (=ブロック) の進化を遂げた
CQB (=近接戦闘) 用短銃身カービン**

入り組んだ市街地、山岳地帯の洞窟、
あるいは船舶艦艇など、暗い場所や狭
い場所でも自在に取り廻せ、さらに現
代戦の必須装備となりつつあるサブ
レッサーを装着した状態でも全長を
抑えるため、M16やM4の銃身を短く

する挑戦は1960年代から「CAR-15」
あるいは「コマンドーカービン」等と
して幾度となく試みられてきた。
制式に支給されるM4A1の拡張装
備として10.3インチ銃身を備えた
「CQBR (=近接戦闘用レシーバー)」

が加わったのは2000年代初頭で、こ
れはSOPMOD計画「ブロック1」か
ら「ブロック1.5」への過渡期と重なる。
2007年には「M4A1カービン
SOPMODブロック2」がU.S.SO
COMの標準装備となり、そこに含ま
れるダニエルディフェンス社製ハン

ドガード「RAS II」を備えた短銃身
アッパーを搭載したCQBカービン
を、NAVY SEALsが「Mk18 Mod.1」
として運用している事が確認された。
そして現在「SOPMODブロック3」
に相当するのでは? と目されてい
るのが「URG-I」なのだ。

操作性に優れ、頬付けもガッシリ決まる「MAGPUL STR
タイプストック」は6段階調整が可能。内部にバッテリーを収
納する必要がないため、ダミーストレージカバーが標準装備さ
れ、バットプレート固定式のスプロ専用用品が新規制作された。



月刊

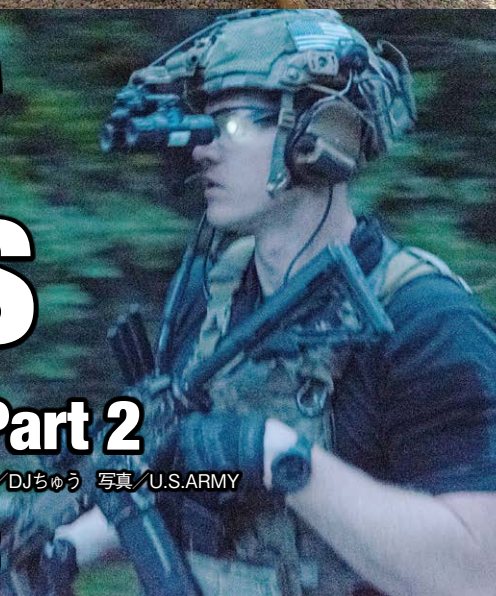
THE GREEN BERET SPECIAL FORCES CIF COMPANIES Part 2 特殊部隊CIF中隊特集パート2



vol.54

Part 2

文/DJちゅう 写真/U.S.ARMY



現在はCTAC (Critical Threat Advisory Companies) へと新たに名称を変更して活動を行なっているグリーンベレー内に存在する、対テロ (CT)、ダイレクトアクション (DA) 等に重点を置く、かつてCIF (Commander's In-extremis Force) と呼ばれた

CTAC。通常のグリーンベレーの中でも、SFARTAETCと呼ばれる特別なトレーニングコースを通過した者のみが配属できる中隊で、グリーンベレーの中でも優秀で志の高い者のみが集まることで有名です。今日に至るまでCIFからCTACに至るまで幾度か名称

を変更したり、JSOCとの関係性が変化してきました。前回はCIFの組織構成や担当地域や任務内容など「CIFとは？」というテーマを展開しましたが、CIF特集第二弾となる今回は、さらに深掘りし、その名称変更に至ることになった背景に迫っていきましょう。

参考文献

AMERICAN SPECIAL OPS [Special Forces CIF Companies], jackmurphywrites.com [SPECIAL FORCES TO DISBAND THE COMMANDERS-IN EXTREMIS-FORCE (CIF)], THE WARZONE [The Army Is Training Specialized Companies Of Green Berets To Crack "Hard Targets"], [Green Berets Hone Their Destruction Of Enemy Air Defenses Skills For A Peer Conflict], HIGHSIDE [Revenge on the CIF - How "The Haters" Cut Special Forces' Last Link To JSOC], SOFREP [Blue Light (Part 1~9) : From the Special Forces, America's first counterterrorism unit][This long-forgotten unit was the direct predecessor to Delta Force][Special Forces direct-action training on Fort Bragg], Military.com [New Acting SecDef Is a Former 'Horse Soldier' Who Played Key Role in Afghanistan Invasion]





74式戦車&16式機動戦闘車 今津駐屯地創立 71周年記念行事

2023年9月3日に行なわれた今津駐屯地（滋賀県）創立71周年記念行事では、この戦車部隊改革を目的にすることが出来た。

今津駐屯地には、2023年3月にできたばかりの第3師団第3偵察戦闘大隊が所在しており、駐屯地司令は第3偵察戦闘大隊長・足立賢一 等陸佐が兼務している。この部隊は昨年度まで74式戦車を主たる装備として配備していた第3戦車大隊を母体として

いる。さらに今津駐屯地には、第10師団第10戦車大隊も所在してい

る。第3戦車大隊廃止前の今津駐屯地は、中部方面隊における戦車王国だったわけだ。

ちなみに、このように師団の垣根を超え、戦車部隊が集約されていた駐屯地はほかにもあった。それが玖珠駐屯地（大分県）だ。かつて第4師団の第4戦車大隊と第8師団の第8戦車大隊の2個部隊があり、西部方面隊の戦車王国だった。現在は、両部隊を統合した西部方面戦車隊が所在している。

第10戦車大隊は1962年に新編された。1989年よりこれまで配備してきた61式戦車に代わり、74式戦車の

配備を開始した。最盛期には4個戦車中隊編成であった。現在は、大隊本部および本部管理中隊、第1・第2戦車中隊となっている。今年度末には74式戦車だけでなく部隊ごと廃止され、第10偵察隊と統合し「第10偵察戦闘大隊」へと生まれ変わる。

かつて戦車王国であった今津駐屯地には、現在断行中の改編で新しく生まれた部隊、そして間もなく廃止される部隊が顔を揃えることになった。その象徴となっているのが、16式機動戦闘車と74式戦車の共存だ。

晴天に恵まれた記念行事当日。来

場者が注目していたのは、もちろん間もなく見られなくなってしまう74式戦車だ。本部隊舎近くの装備品展示エリアには74式戦車が置かれ、常に人波が絶えることはなかった。

第10戦車大隊のシンボルマークは「金の鯨」だ。司令部のある守山駐屯地近傍の名古屋城大天守の上に載せられている「金の鯨」をイラスト化している。

観閲行進では、その「金の鯨」を砲塔に描いた74式戦車たちが堂々たる行進を見せた。観閲官の前を通り過ぎる時の戦車乗員は、姿勢を正し、



東西冷戦の真っ只中に配備を進めていった74式戦車——。2024年3月末をもって、すべて引退することが決まった。それも戦車部隊ごと廃止するという陸自創設以来最大の改編だ。これに伴い、本州から戦車部隊は完全に消える。その代わりに16式機動戦闘車を配備した部隊が続々新編され、戦車に代わる打撃力として期待されている。そんな中、中部方面隊の“戦車王国”たる今津駐屯地では、この新旧装備が顔を揃えることになった。

陸上自衛隊では、大規模な機甲科改編を行なっている。それが、本州から戦車部隊を一掃し、北海道と九州にのみ戦車を配置するという大胆な計画だ。

しかし、戦車の打撃力は戦術上きわめて重要だ。そこで、戦車部隊に代わって、普通科・機甲科・特科（野

戦・高射）・施設科といった諸職種を統合した「即応機動連隊」および機甲科（戦車・偵察）をまとめた「偵察戦闘大隊」を新編している。

この改編の中で、冷戦時代の主力戦車である74式戦車がすべて引退し、16式機動戦闘車が「即応機動連隊」および「偵察戦闘大隊」に配備され

ていく。

こうして、本州に残る戦車部隊は、東北方面隊第9師団（青森駐屯地・青森県）の「第9戦車大隊」、中部方面隊第10師団（守山駐屯地・愛知県）の「第10戦車大隊」および第13旅団（海田市駐屯地・広島県）

の「第13戦車中隊」の3個部隊のみとなった。いずれとも今年度（2024年3月末）ですべて廃止となる。

今津駐屯地での一般公開は今回が最後となる第10戦車大隊。同部隊の主力装備である74式戦車が堂々たる行進を見せた。来年度より第10偵察戦闘大隊へと改編され、74式戦車は日本から完全引退となる。